論　文

遍路文化の保存と活用についての二、三の提起

愛媛大学　法文学部　人文学科
教授　内田　九州男

はじめに

「四国八十八箇所霊場と遍路道」の世界遺産登録を進める動きは、本年３月に「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会が四国四県等89団体で結成され、本格化した。この会は、国の文化審議会から示された、「四国八十八箇所霊場と遍路道」が「我が国の世界遺産暫定一覧表」に記載される上での諸課題を研究・検討するために結成されたもので、①構成資産の普遍的価値の証明、②構成資産及び緩衝地帯の保護措置、③受入態勢の整備、④お接待文化の継承、⑤普及啓発、等の部会を設置し、事業を進めることとしている。この五つの部会がいつ発足しどう活動しているか、その全体像は承知していないが、筆者の関係している①は名称を「普遍的価値の証明」部会としてこの９月に発足した。このように比較的ゆっくりとした動きであるが、各部会が成立してそれぞれの課題について研究や検討を開始するならば着実に成果が生み出されることと思われ、その日が一日でも早いことを期待したい。

「四国八十八箇所霊場と遍路道」の世界遺産登録を巡る動向は以上のようなものであるが、これを念頭において、本稿では遍路文化の保存と活用について二、三の問題、具体的には「巡礼文化の国際比較ー巡礼と奇跡ー」「遍路文化の活用にむけて」等若干の問題提起を行いたい。

１　巡礼文化の国際比較ー巡礼と奇跡ー

平成20年９月26日公表の文化審議会報告で、四国遍路について

> 世界遺産一覧表に記載されている国内外の同種遺産及びその候補地との比較研究を継続的に行うことが必要である。

と指摘されているように、四国遍路と海外の巡礼及び巡礼地との比較研究の一層の推進が必要とされている。愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会では、平成19年度から３カ年をかけて海外巡礼地調査を実施した。平成19年度はスペインのサンティアゴ巡礼、20年度がフランスのモン・サン・ミシェル、パリ、ルルド、21年度はローマ、北イタリアのサクロモンテであった（註①）。

この中で遍路・巡礼研究で普段我々があまり議論していない問題があることに気づいた。その一つが「巡礼と奇跡」を巡る問題である。まずそのことについて述べたい。

①北イタリアのオローパのサクロモンテ

オローパはマリア信仰の聖地であった（図１）。この地の聖堂には「黒いマリア」像が祀られている。そして教会附属のミュージアムでは、その展示室や廊下の壁は信者たちから納められた絵画や写真等で埋め尽くされていた。それらの奉納物は様々な願いが叶った、あるいは災厄から逃れられた、災厄にあったが軽くで済んだ等の

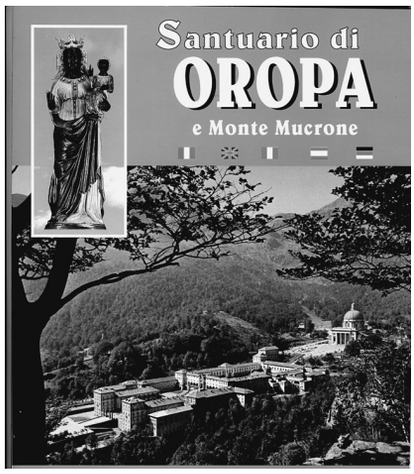


図１　オローパのガイドブック

図２　手・足等のレリーフ

図３　奉納された杖類

図４　馬に蹴られた図

図５　自動車事故の図

意味を表すものが多かった。図でこれを紹介しよう。

図２は、そうした展示の一部で、人間の手や足、両眼、あるいは幼児などのレリーフが飾られている。手・足・両眼はその部位が病に冒されていて、その平癒を願ってか、あるいはその病が平癒したので、そのお礼に納めたかいずれかであろう。子供のレリーフは子供を授かりたい、あるいは子供の病を治したい願いを込めたものと解される。

図３は階段の踊り場の天井につるされているもので、金属製の籠に入れられた杖類である。足の病が治り、杖が不要となり、感謝の意味からであろうか、現物が奉納されたのであろう。

図４と図５は、共に事故に遭遇したことを表しているが、どちらにもマリア像を描き、マリアに対する信仰によって災厄の程度が軽くて済んだことを語ろうとしているものと思えた。

このような奉納物のあり方からは、内藤道雄がその著『聖母マリアの系譜』（八坂書房、2000年刊）で、

神仏に願かけをしたり、頼みごとを祈ったりするのは洋の東西を問わない。もっともカトリック文化圏

では、願い事はキリストではなくマリアが引き受けている。

と指摘しているカトリック文化圏の中でのマリアの役割が明瞭に現れているようである。

②ルルド

フランス南部のルルドは「傷病者巡礼」地として非常に有名な土地である。1858年にマリアの出現があって聖地として認められ、多くの人々が巡礼地として訪問するようになったのであった。ルルドの様子は『奇跡の聖地ルルド』（文：田中澄江、写真：菅井日人）等優れた写真集も刊行されているので、それらに依っていただきたい。

なお、オローパのサクロモンテ調査については、矢澤知行「北イタリアのサクロモンテ（聖山）巡礼」、ルルドの調査については、内田九州男「モン・サン・ミシェルとルルドの調査」（『四国遍路を中心とした日本・世界の巡礼の総合的研究　平成21年度報告書』）を参照願いたい。

③四国遍路での諸願成就

（ⅰ）平等寺の箱車と奇跡　写真（図６）は筆者が2010年の２月札所調査で平等寺を訪れた際に撮影したもので、本堂に安置してある３台の箱車である。

図６　平等寺本堂の箱車

この箱車のことは西端さかえ『四国八十八札所遍路記』（大法輪閣、昭和39年）に次のように記してある。

本堂にはここで足の立った人のいざり車が３つ奉納されていた。いずれも有蓋で形が大きい。松葉杖も数本あった。

また同書は

病者への心づかい　住職谷口津梁師は80歳というがなかなかお元気、実際に見た霊験を記録した印刷物を見せて下さった。大正年間から昭和４年にかけてのもので、いざりの治ったひとが５人、リユウマチス、眼病、精神病、肺病等でおかげをいただき平癒した人たちのことも委しく記されていた。昭和11年にも、現在高松市塩屋町に住むＴ氏妻Ｔさんが、長年の胃腸病に苦しみ、夫と娘につれられて遍路してきたときに、加持水をしらずにのみ、不思議と平癒して健康体となり、いよいよ信仰深くなっているお話などあった。

と、遍路によって病（足の障害、リユウマチス、眼病、精神病、肺病等）が治癒した例が紹介されている（註②）。

（ⅱ）弥谷寺での奇跡。同じく『四国八十八札所遍路記』の弥谷寺の項には次のような話が載せられている。

広島県尾道市久保町のＳＫ氏は小児マヒで足がたたなかったが、当寺の本尊さまや大師さまに祈願して全快した。すると姉のＳＳ子さんがまた小児マヒで、足がたたなくなった。一心祈願をして全快し、昭和30年３月松葉杖を奉納し、毎年お礼まいりにくる。また香川県琴平町のＫＫ氏は脊椎カリエスで病臥していたが、大師を信心して霊験を頂き、昭和33年春、お礼まいりにきてギプスを奉納していった。

ここの記載は小児マヒや脊椎カリエス治癒の例である。

（ⅲ）「四国遍路の功徳ー救われた人びと」。「四国八十八ヶ所霊場会」発行の『先達教典』（平成18年刊）には、「四国遍路の功徳ー救われた人びと」の項が設けられ、病気平癒を含む８例が掲載されている。この中では、愛媛県今治市沖の大島の島四国（全長63㎞）を歩き、難病治癒の機縁をつかんだ池田勇人（1899～1965、元内閣総理大臣）氏の例は注目される。

以上（ⅰ）～（ⅲ）のような諸願成就とくに病気治癒の例は、すでに引用したように西端氏の『四国八十八札所遍路記』に多く紹介され、その証拠として箱車、松葉杖、ギブスの奉納等があったことも記されている。筆者は、遍路に出る人々の多くは心に秘めた思いの実現ある

いは達成を願っていると推測しているのであるが、そうしたことへの注視、あるいは関心が薄くなっているのであろうか、先に示した札所への奉納物を目にする機会は今日では滅多にない。しかし西端氏が遍路をした時期は多くの札所で目にすることができたようである（註③）。

こうした霊験話は慎重な取扱いが必要であろうが、同時に医療関係者や心理学分野の専門家等の参加を得てその内容の真摯な学問的な検討の場が必要である。

2　遍路文化の活用にむけて

（1）サンティアゴ巡礼における道標の紹介

①巡礼道の設定と車道との分離

サンティアゴ巡礼の調査の折、車道を走っている車の車窓から巡礼道が見えた（図７）。この道は未舗装の地道であった。サンティアゴ・デ・コンポスティーラに近い農村では、車道と巡礼道が区分され標識でもその区分が明示されていた（図８・９）。この２例のように車道と巡礼道が区分されていると巡礼者は安心して歩ける。

②標識の工夫

イメージの統一。（ｉ）ホタテ貝のイメージ化。サンティアゴ巡礼では、巡礼者や巡礼にかかわるものを示すのに巡礼の象徴ホタテ貝を意匠化したものがつくられ、様々な標識に活用されている。

(a)　ホタテ貝とその意匠化。図10と図11に示した。

(b)　巡礼者のイメージ化。図12に示した。瓢箪をぶら下げた杖をもつ歩行者。これが巡礼者のイメージのデザインである。図９にもある。

図７　車窓から見た巡礼道
巡礼道は車道と畑の間の地道

図８　車道と巡礼道の区分のある道
左の白線の外が巡礼道

図９　道の利用規制看板
図８の右端にある
看板

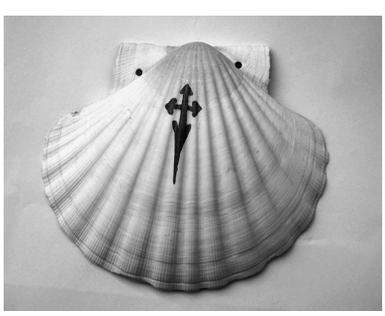


図10　ホタテ貝

図11　左の意匠化

図12　巡礼者の意匠

図10はサンティアゴ・デ・コンポステーラで購入したホタテ貝（土産品）。赤色剣十字は聖人サンティアゴを示す。また上部にある２個の黒点は紐をとおす穴。

図13
巡礼道を示す大看板

図14　巡礼道を示す看板と足下の標識

図15　壁に貼ったホタテ貝のイメージ。
この壁の前は道。

図16　ブルゴスの町の建物の壁に貼ってあった道標。「サンティアゴまで533km」の意味か

図17　ブルゴス大学内の巡礼関係のインフォメーションの場所を示す貼付プレート

図18　巡礼者用の病院を示すプレート
（ビアフランカにて）

図19　道路脇の壁の道標
オレンジや青の矢印が方向を示す。

図20　ビアフランカの地図
道と様々な便益施設の表示

図21　ビアフランカから隣町までの巡礼道地図

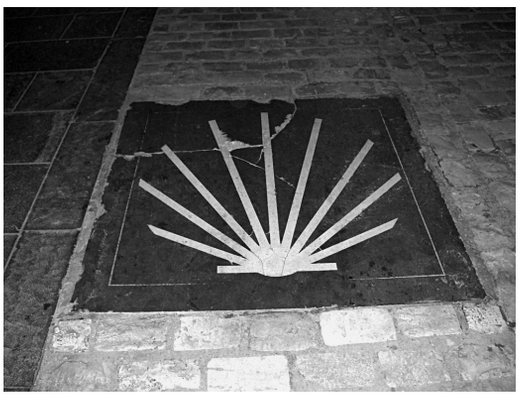
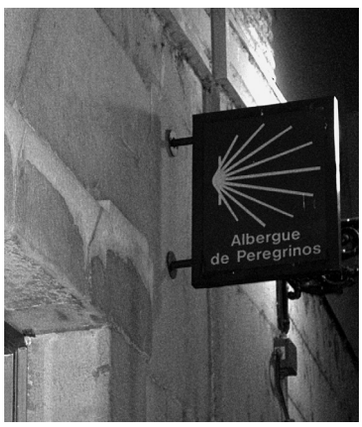


図22　道に埋め込まれた標識
すぐ近くに「アルベルゲ」（巡礼者宿があった。ログローニョの町）



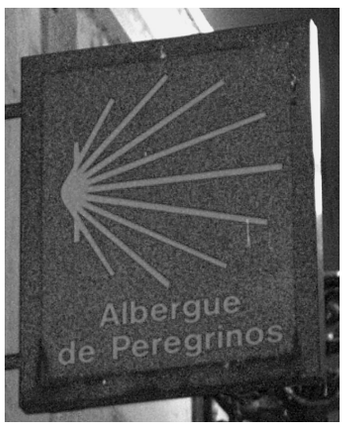


図24・25　アルベルゲの看板
ホタテ貝のデザインと「巡礼者の宿」の文字表示
（ログローニョの町）

図23　道に埋め込まれた金属製ホタテ貝。
レオン大聖堂への道

図26　レオンの町のアルベルゲ看板

図27　ポルトマリンの民営アルベルゲの案内看板
巡礼者のイメージがおもしろい。

以上で図の紹介を終わる。要点は３点。

①車道と巡礼道の区分。これは遍路道の整備を考える際大いに参考になる。特に松山市内の浄土寺から繁多寺への道の途中、県道40号線の一部は歩道すらなく、整備の必要を強く感じる部分がある。

②統一イメージ戦略の採用。ホタテ貝、巡礼者のイメージの意匠化の問題。四国遍路の場合は、「へんろみち保存協力会」が早くからこれに取り組んでいる。それは図28に示した。今日でもこの取組は遍路に対する貴重なかつ大きな支援となっているが、是非今後官民ならびに地域の力を結集する形で一層判りやすく、一層イメージゆたかなものに成長させてほしいものである。

③懇切丁寧な、かつ多様な案内。ビアフランカあたりで見た各種の案内図や標識の数々。特にルート上あるいは近辺の便益施設の所在情報は貴重である。

図28　「へんろみち保存協力会のみちしるべ」各種（註④）

（２）遍路体験コースの設定と普及

愛媛大学では、平成17（2005）年度から「遍路をあるく」授業を開始した。歩き遍路体験学習授業である。すでに同じような授業を行っていた今治明徳短期大学と共同で５月に土日２日連続で「さつき遍路」を、７月に土日２日連続で、愛媛大学単独で「夏へんろ」を実施してきた。この授業のなかで、松山市内や今治市内では歩き遍路１日体験コースが割と手軽に組めるという実感を持った。松山市内では、48番西林寺から53番円明寺まで約20kmでほぼ１日のコース。また筆者は48番西林寺から51番石手寺を経て道後温泉までを他の大学の学生達と歩いたこともある。これはほぼ４時間前後のコース。何れも初めての学生たちにとっては、“歩いた”という実感がもて、かつ“歩ききった”という達成感もあるものであった。途中で接待にでもあおうものならきわめて得難い体験をしたことに感動する。私のように車通勤していて長距離を歩く機会を持てない者にとっては、20km歩くのも相当に歩きがいのある距離であった。こうした体験から若者にとっても熟年世代にとっても１日程度の歩き遍路体験はきわめて穏やかな、かつ自分の健康度を測る有難い機会であると実感した次第である。

そこで提案であるが、それぞれの地域や職場で、最大１日のコースから数時間程度のモデルコースを組んで、歩き遍路体験を普及させる取組みをしてはどうであろうか。健康ブームで朝夕のウォーキングばやりの昨今、多くの方の興味を引くのではないだろうか。

実はもうすでにそういう提案はウォーキングの専門家からなされているのである。『えひめを歩こう　ウォーキングコースガイド』（忠政啓文著、愛媛新聞社刊）がそれで、西條遍路道（10km、約３時間半）、道後界隈（4.5km、約２時間）、旧三坂街道（６km、約３時間）、岩谷寺遍路道（6.5km、約３時間半）等のコースが地図入り、発着地情報も盛り込んで掲載されている。

まずはこれを活用してみてはどうであろうか。そしてこうした短い時間と距離による体験を何回か積んで１日コースに挑戦する準備をするのもいいのではないだろうか。

おわりに

拙い内容であったが、今考えていることを提案させていただいた。「四国八十八箇所霊場と遍路道」の世界遺産登録を実現する鍵は、地元・地域での支持の拡大にあると筆者は考えているが、こうした取組みに本稿が少しでも参考になれば、望外の喜びである。

註①
スペインのサンティアゴ巡礼地調査の報告は『四国遍路を中心とした日本・世界の巡礼の総合的研究　平成19年度報告書』（愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会編）、フランスのモン・サン・ミシェル、パリ、ルルド、とローマ、北イタリアのサクロモンテ調査報告は『四国遍路を中心とした日本・世界の巡礼の総合的研究　平成21年度報告書』（同編）に掲載した。

註②
「いざり」とは、古い言葉で今日ではほとんど使わない。『日葡辞書』（1603年刊）では、「イザリ（膝行）両手を使って進む不具者」とある。ここで言う「不具者」という言葉も今日では使わない。また『日本国語大辞典』では「ひざやしりを地につけながら進むこと。膝行（しっこう）。」とあって、さらに「足が悪く、立っては歩けない」障害者をさす言葉として解説されている。
なお、西端著書からの引用文中のＴ、ＳＫ等は筆者において実名をイニシャル化したものである。

註③
馬場恵二『癒しの民間信仰、ギリシアの古代と現代』（東洋書林、2006年）参照

註④
『空海の史跡を尋ねて　四国遍路ひとり歩き同行二人　［地図編］第７版』（宮崎建樹著）

Profile　内田九州男（うちだ　くすお）

1698　京都大学大学部史学科卒業
1969　大阪城天守閣学芸員
1992　現職
愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会代表